

不動堂遺跡の建物復原

建造物研究室

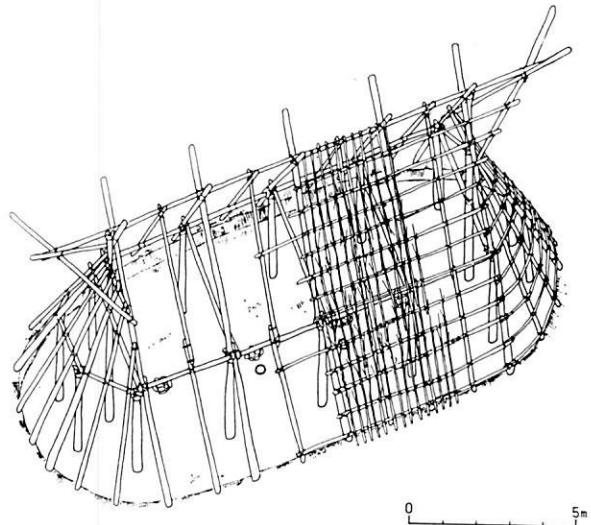
富山県下新川郡朝日町に所在する不動堂遺跡は、昭和47・48年に行なわれた圃場整備の事前調査で、長軸17m、短軸8mもある調査当時としてはわが国最大の堅穴建物をはじめ20棟を越える縄文時代住居跡が発見された。昭和49年には国の史跡として指定を受け、今回建物の復原を含む史跡整備事業が実現することになった。整備の主旨として旧環境の再現を意図し、植生を可能な限りそれに近づけるとともに、原材料・原技法による建物の復原を図った。今回復原の対象としたのは上記の大型建物と、これに近接する2棟の小型建物の計3棟で、多少なりとも建築群としての構成がみられるようにとの配慮が含まれている。

大型建物に関しては先に第1次調査概報でその試案を発表した。今回それを実際に復原建設するという前提にたって見直しを行なった結果、一部変更した個所もあり、実施仕様を含めてそれらを列挙すると、1、原位置に建てることにした結果、遺構保護の見地から遺構上に約60cmの厚さに砂養生を施し、コンクリートスラブを打って建築基盤を形成した。2、柱位置にかける叉首は下叉首(下方掘立て、上方桁乗せ)と上叉首(下方又木、上方組合せ)とに分け、材料の入手易と構造の安定をはかった。3、叉首中間位置に追叉首風に堅木を配り、屋根地の補強を行なった。4、屋根地は、叉首・追叉首と、これに直交する木舞(屋中にあたる)、流れ方向に細かく入れた枝付きソダの垂木、の三者で構成した。5、降雪に対処するため屋根勾配をやや強め10:12.5とした。6、出入口の位置は不明であったが、風雪の通る方向の影になる北面にとった。7、使用する材料は可能な限り原材料をめざし、柱・桁・叉首などはクヌギ・ナラの雜木類に限定し、横木舞・垂木の小材

は比較的曲率にも自由のきくカエデ・タモなどとした。また緊結用材にはネソ(マンサク)を主にツタ・カツラの類を使用した。ただし、特に荷重のかかる個所は見え隠れに丸鋼・鍛・木栓で補強した。屋根はカヤを用いた。8、木材加工も原仕様を尊重し、切断は一旦チェンソー・鋸で行なった上、ナタで整形した、などである。他の2棟についてもこれに準じた。

史跡整備の一例として、今後の活用が期待される。

(細見啓三)



大型建物復原架構図